# NewsAlert・図解版

番号付きのコマ解説を英語の原版と並べて掲載しています。吹き出しと絵の中の文字は原版のままです。

歴史に関する記述や解釈には、それぞれの出典を示しています。

## 目次


01 · 録音テープから印刷物へ
02 · 気象戦という主張
03 · 宇宙での対抗措置
04 · ポーランドとバチカン
05 · 分裂したホワイトハウス
06 · 大韓航空007便をめぐる危機
07 · 外交と暗殺
08 · レバノン戦争の罠という見方
09 · グレナダと情報統制
10 · 経済に仕掛けられた時限爆弾
11 · 立場が逆転したキューバ危機
12 · クレムリンの変化
13 · シャトルをめぐる対立
14 · 休刊と引き継ぎ

# 01・録音テープから印刷物へ




英語の原版

**1.** ベーターの音声書簡は1982年11月に終了した。オーディオ・ブックス社は印刷物で報告を続けた。

**2.** 『参考ダイジェスト』の準備中、1983年3月から6月までに『News Alert』の暫定号が4号出た。

**3.** 最初の定期号は1983年8月12日に刊行された。冒頭の話題は「ディベートゲート」とポーランドだった。

**4.** 会報は、対立する権力集団、経済的圧力、秘密作戦とされるものを結び付けるベーターの枠組みを採用した。

**5.** 出版社とベーターは別の立場だった。後の告知は、ベーターが『News Alert』に関与していなかったと明記した。

**6.** 編集者は、自らの判断による報告であると述べ、キリスト教的な視点と、一部に非公開の情報源を用いたことを示した。

**7.** アーカイブには暫定号4号、定期号12号、1984年3月26日付の経過報告が収録されている。

**8.** このコミックでは主な論点を紹介する。詳しい内容や原文はアーカイブで確認できる。

# 02・気象戦という主張




英語の原版

**1.** 1983年3月の暫定号は、音声書簡第79号に戻る。そこでベーターは、ソ連の兵器が嵐を起こし、北極の空気を移動させ得ると主張した。

**2.** 同号は、ハリケーン・イワ、太平洋の暴風雨、内陸の洪水を、米国に対する計画的な活動の一部と解釈した。

**3.** 太平洋の気象衛星の故障を、米国による接近中の嵐の追跡能力を弱めた攻撃とみなした。

**4.** 5月号はコーリンガ地震を、カリフォルニアに埋めた爆弾で地震を誘発できるとしたベーターの以前の主張に結び付けた。

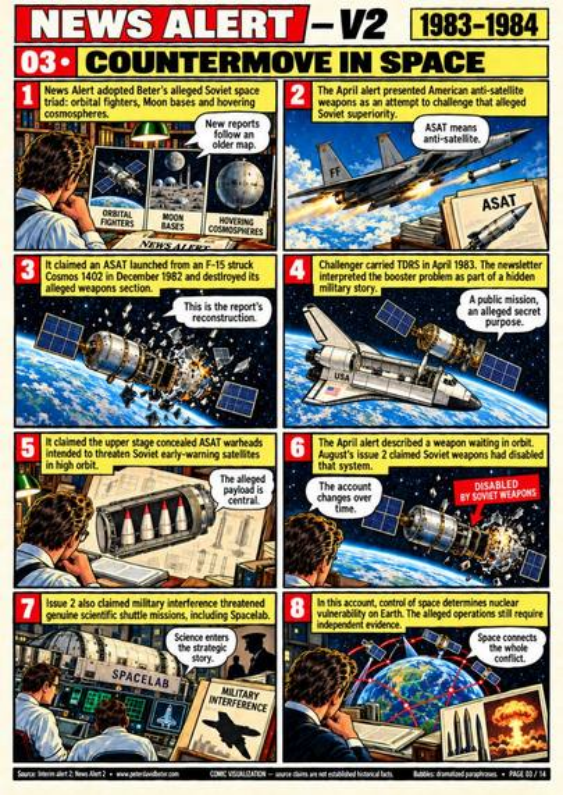
**5.** 教皇のポーランド訪問をめぐる危機が、米国への地球物理学的な報復を引き起こす可能性があると示唆した。

**6.** 定期第2号は、8月の嵐アリシアとバリーを、ヒューストンとケープカナベラルのシャトルに向けた警告と描いた。

**7.** 1984年1月刊行の第11号は、12月の厳しい寒さを、軍備管理交渉が行き詰まる中でのソ連からの警告と説明した。

**8.** これらの報告は災害を戦略的な物語に組み込む。出来事と、その背後にあるとされる原因には別々の証拠が必要である。

# 03・宇宙での対抗措置




英語の原版

**1.** 『News Alert』は、軌道上の戦闘機、月面基地、浮遊するコスモスフィアから成るというベーターの「ソ連の宇宙三本柱」を採用した。

**2.** 4月号は、米国の対衛星兵器を、ソ連が優位にあるとする見方への挑戦として描いた。

**3.** 1982年12月にF-15から発射された対衛星兵器（ASAT）がコスモス1402号に命中し、兵器部門とされる部分を破壊したと主張した。

**4.** 1983年4月、チャレンジャーはTDRSを搭載して飛行した。会報はブースターの不具合を、秘密の軍事活動の一部と解釈した。

**5.** 上段ロケットに、ソ連の高軌道早期警戒衛星を脅かすためのASAT弾頭が隠されていたと主張した。

**6.** 4月号は軌道上で待機する兵器を描いた。8月発行の第2号は、ソ連の兵器がそのシステムを無力化したと主張した。

**7.** 第2号は、軍事的な干渉がスペースラブなどの純粋な科学目的のシャトル任務も脅かしたと主張した。

**8.** この説明では、宇宙の制御が地上の核攻撃に対する脆弱性を左右する。作戦があったという主張には独立した証拠が必要である。

# 04・ポーランドとバチカン




英語の原版

**1.** 5月号は、ポーランドを会報が想定する対立勢力の争いにおける機微な最前線として描いた。

**2.** 教皇の訪問で東欧に動乱を起こす計画があったという、ベーターの「教皇の革命」説を引き合いに出した。

**3.** 「連帯」をポーランド労働者の運動と見る一方、国外からの影響の経路としても解釈した。

**4.** 迫っていた1983年6月の教皇訪問を、革命計画とされるものを復活させる新たな機会と描いた。

**5.** 第1号は、訪問が逆の結果を生み、ソ連の情報機関がバチカンで対立相手の裏をかいたと主張した。

**6.** ベーターが以前に著名人のすり替えを主張したことを、教皇の行動の変化の説明に用いた。

**7.** ワレサをめぐる造船所の状況と、教会の農業基金構想を政治戦略の変化の兆しと見た。

**8.** この章は宗教、労働運動、地政学を結び付ける。隠れた理由という説明は、公に確認できる出来事と分けて考える必要がある。

# 05・分裂したホワイトハウス




英語の原版

**1.** 第1号は「ディベートゲート」で始まる。1980年の大統領候補討論会に先立ち、カーター陣営の準備資料がレーガン陣営に渡った。

**2.** 調査の拡大と、陣営がどのように資料を入手したかをめぐる食い違う説明を追った。

**3.** ジェームズ・ベーカーとウィリアム・ケーシーの対立には、討論資料をめぐる見解の相違を超えるものがあると解釈した。

**4.** 会報は、ベーターが描くより広い権力闘争の中で、ブッシュ派とレーガン派が対立しているとした。

**5.** スキャンダルがレーガン側を弱め、共和党指導部内の対抗勢力を利する可能性があると示唆した。

**6.** 12月発行の第10号はホワイトハウスの対立と異例に厳重な大統領警護に再び触れ、いずれもより深い緊張の兆候と解釈した。

**7.** 1月発行の第12号は、「ディベートゲート」を利用する動きはいったん収まったものの、再燃する可能性があると述べた。

**8.** 公になった経緯はスキャンダルであり、会報はその説明として秘密の派閥戦略を提示した。

# 06・大韓航空007便をめぐる危機




英語の原版

**1.** 第3号は、1983年9月にソ連領空に入った後、撃墜された大韓航空007便に焦点を当てた。

**2.** 1978年の大韓航空902便の事件と比較し、音声書簡第33号を参照するよう読者に案内した。

**3.** 機体の慣性航法装置と乗務員の手順を取り上げ、偶発的な航路逸脱という説明に異議を唱えた。

**4.** 乗務員がだまされ、情報収集任務に就いていると信じ込まされたと会報は主張した。

**5.** さらに、国際世論をソ連に敵対させるため、惨事が意図的に仕組まれたと主張した。

**6.** 報告は公式声明、傍受された録音、国連での発表時期を重視した。

**7.** 後の号はこの危機を、関係の悪化と欧州での米国の新型ミサイルをめぐる対立に結び付けた。

**8.** 『News Alert』は実際に起きた惨事に隠れた原因を提案した。秘密の計画があったという主張は、それ自体を検証する必要がある。

# 07・外交と暗殺




英語の原版

**1.** 『News Alert』は暴力事件を、暗殺によって国際的な勢力関係を変えることができるという外交上の主張で結び付けた。

**2.** 第4号は、ベニグノ・アキノが亡命先からマニラに戻り、航空機を降りた後に殺害されたことを取り上げた。

**3.** フェルディナンド・マルコスを、米国の支援を受けつつも要求が増え、支持者を困らせた指導者として描いた。

**4.** アキノ殺害はマルコス失脚の始まりとして仕組まれたと主張し、その構図をイラン国王の失脚と比較した。

**5.** 第6号は、訪問中の韓国代表団の一行が死亡したラングーン爆破事件を検討した。

**6.** 会報は、韓国旅客機事件と関連があるとみなした人物を標的にしたソ連の作戦だとして、襲撃をソ連に帰した。

**7.** いずれの事例でも、公の暴力を秘密の同盟、報復、都合の悪い人物の排除という観点から解釈した。

**8.** 出来事、推測された動機、責任の所在は別々の問いである。一つが分かっても、他が自動的に確定するわけではない。

# 08・レバノン戦争の罠という見方




英語の原版

**1.** 第4号は、米国のレバノン関与がベトナム戦争での段階的な拡大に似た経緯をたどると警告した。

**2.** 海兵隊の陣地が脆弱で攻撃が増えていると述べ、その危険がより大規模な関与を正当化するために使われると主張した。

**3.** 第6号は10月の海兵隊宿舎爆破事件を取り上げ、背後の責任者について独自の主張を展開した。

**4.** 後の報告はレバノンをシリア、イスラエル、ペルシャ湾と結び付け、地域の危機を一つの戦略の一部として描いた。

**5.** 第10号は、空爆、報復、戦艦ニュージャージーの大口径砲による攻撃などの艦砲射撃を追った。

**6.** 第11号は、ジェシー・ジャクソンの働きでシリアに拘束されていたロバート・グッドマン飛行士が解放されたことを、一時的な中断と解釈した。

**7.** 3月の報告は、米軍の撤退を「もう一つのベトナム」を作るとされた計画の崩壊と説明した。

**8.** 最後の報告は今回の逆転を、ソ連が宇宙で成果を収めたという主張に結び付けた。この因果関係は会報による解釈である。

# 09・グレナダと情報統制




英語の原版

**1.** 第7号は、ベイルートの海兵隊宿舎の惨事の直後に始まった米国のグレナダ侵攻を検討した。

**2.** 米国人の生命保護という公表された理由と、他のカリブ諸国の参加に触れた。

**3.** グレナダを1975年のマヤグエース号事件と比較し、大きな失敗の後で世間の関心をそらす点が似ていると主張した。

**4.** 侵攻計画は危機が公になる前から存在し、ベイルートでの攻撃が最終的な実行時期に影響したと主張した。

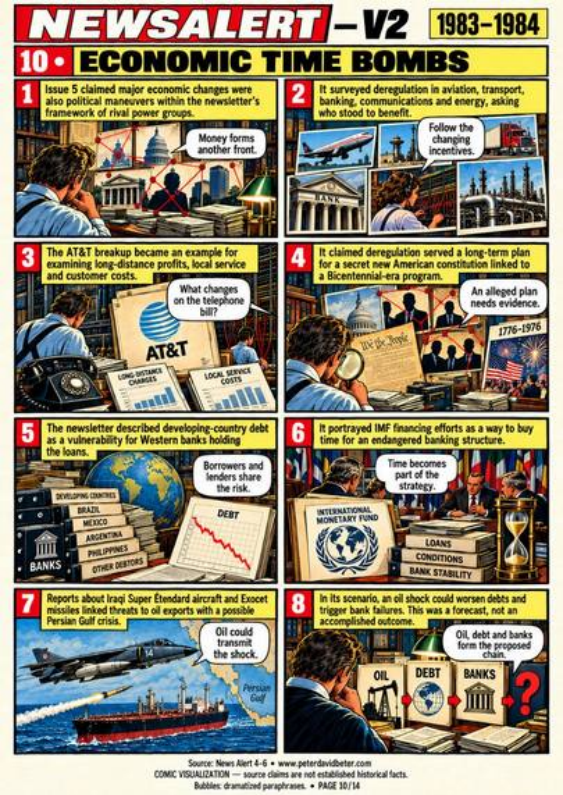
**5.** 当初、独立した報道陣が排除されたことと、当局による情報統制を批判した。

**6.** 第7号は、この事例を政府職員、出版、機微な情報に対する制限と結び付けた。

**7.** 第12号は、撃墜された米国のヘリコプターとホンジュラスでの演習を取り上げ、ニカラグアへのさらなる介入に警鐘を鳴らした。

**8.** 軍事行動とその報じられ方をめぐって、権力と説明責任についての議論が繰り返される。

# 10・経済に仕掛けられた時限爆弾




英語の原版

**1.** 第5号は、会報が想定する権力集団の対立の中で、大きな経済変化も政治的な駆け引きだったと主張した。

**2.** 航空、運輸、銀行、通信、エネルギーの規制緩和を概観し、誰が利益を得るのかを問うた。

**3.** AT&Tの分割は、長距離通信の利益、市内サービス、利用者の負担を検討する事例になった。

**4.** 規制緩和は、建国200年記念期の事業と関係する新たな米国憲法の秘密計画に資すると主張した。

**5.** 途上国の債務を、その貸付債権を保有する西側銀行の弱点と描いた。

**6.** IMFによる資金供給の試みを、危機に直面する銀行体制の時間稼ぎとみなした。

**7.** イラクのシュペル・エタンダール機とエグゾセ・ミサイルの報告は、石油輸出への脅威をペルシャ湾危機の可能性と結び付けた。

**8.** この筋書きでは、石油ショックが債務を悪化させ、銀行破綻を引き起こし得る。これは予測として示された。

# 11・立場が逆転したキューバ危機




英語の原版

**1.** 6月号は、欧州で予定されていた米国のミサイル配備を、1962年にキューバに置かれたソ連のミサイルと比較した。

**2.** ソ連が米国の領土に報復すると警告したことを、対立が欧州を越える兆候と解釈した。

**3.** スウェーデンとノルウェーの海域での潜水艦事件を、秘密の対応があったという手掛かりに挙げた。

**4.** 第6号は、ソ連が米国沿岸に水中発射式のミサイルを再び設置していると主張し、ベーターの1976年の説明を繰り返した。

**5.** 第9号は欧州への配備を、ミサイル交渉の決裂と米ソ対立の激化に結び付けた。

**6.** 第10号はクレムリンを追い詰められた勢力として描き、その強硬化を米国の政策への反応と解釈した。

**7.** 1月発行の第12号は、緊張が和らいだように見える状況に疑問を呈し、軍備管理をめぐる争いが真の関係改善を阻んでいるとした。

**8.** 公になったミサイル配備の対立と会報の秘密兵器説が、戦略的な誤算への警告を形づくった。

# 12・クレムリンの変化




英語の原版

**1.** 第8号は、反ボリシェヴィキの指導層がソ連の権力構造を上から作り替えたというベーターの説明を発展させた。

**2.** 会報はアンドロポフが長く公の場に現れなかったことと、健康状態をめぐる不確かさに触れた。

**3.** 公式発表の数か月前の1983年11月5日に死亡したと会報は主張した。

**4.** 後の号は、アンドロポフ名義の声明や昇進人事を、権力の継続という印象を保つ試みと解釈した。

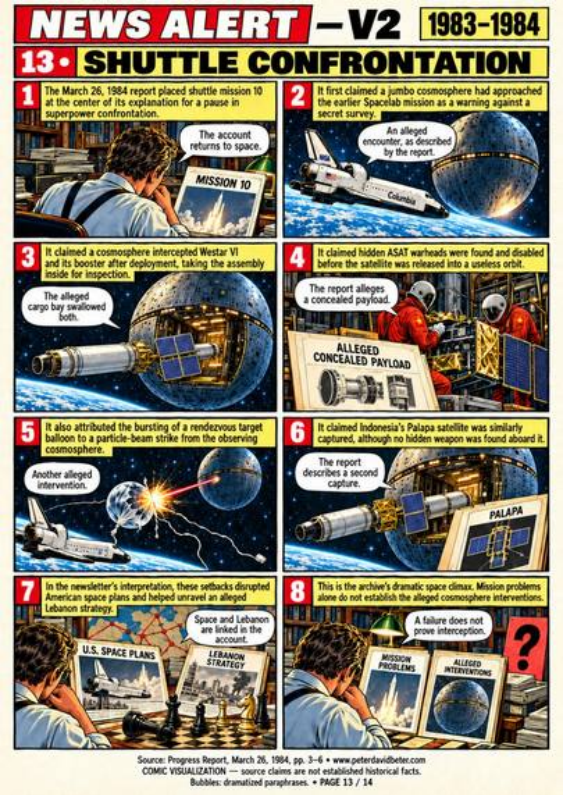
**5.** 第8号は、定着した地方幹部を交代させる計画を、政治・経済改革の新たな段階として描いた。

**6.** 以前の報告は、グリゴリー・ロマノフが公式の後継者になる可能性が高いとし、ミハイル・ゴルバチョフにも重要な役割を与えた。

**7.** 3月の報告では、チェルネンコを過渡期の名目上の指導者とし、ゴルバチョフを指導部三人のうち最も有力な人物とした。

**8.** 発行順に読むと、主張や予測の変化が分かる。先の予測も、後の解釈と併せて記録しておく必要がある。

# 13・シャトルをめぐる対立




英語の原版

**1.** 1984年3月26日の報告は、超大国間の対立が小休止した理由を説明するうえで、シャトル第10任務を中心に置いた。

**2.** まず、秘密の調査への警告として、大型コスモスフィアが以前のスペースラブ任務に接近したと主張した。

**3.** ウエスターVIとブースターが放出された後、コスモスフィアがこれらを捕捉し、点検のため機内に取り込んだと主張した。

**4.** 隠されていた反衛星弾頭が発見されて無力化され、その後、衛星は利用できない軌道に放出されたと主張した。

**5.** ランデブー用の標的気球が破裂したのも、監視していたコスモスフィアから放たれた粒子ビームのためだとした。

**6.** インドネシアのパラパ衛星も同様に捕捉されたが、搭載された秘密兵器は見つからなかったと主張した。

**7.** 会報によると、これらの失敗によって米国の宇宙計画が混乱し、レバノンでの戦略とされるものが崩れる一因になった。

**8.** ここがアーカイブの宇宙をめぐる物語の山場である。任務のトラブルだけでは、コスモスフィアが介入したという主張は確かめられない。

# 14・休刊と引き継ぎ




英語の原版

**1.** 第12号は休刊を告知し、出版社の資金が底をついたことを説明した。

**2.** 出版社は長年にわたり録音の費用を補助してきたことと、その後に新しい印刷版を維持する難しさを説明した。

**3.** 第11号では、定められた条件の下で完全な音声書簡の録音に対する公開ライセンスを告知した。

**4.** オーディオ・ブックス社がカセットの自社販売をやめるに当たって、録音を他の配給元から入手できるようにすることが目的だった。

**5.** 最終報告では、テキサスに戻って再び資金を集める取り組みを説明し、最近の出来事にも言及した。

**6.** 告知は、ベーターと出版社の関係が終わっていたことを強調した。『News Alert』は独立した編集責任の下で続いた。

**7.** 本編とこの補遺は、アーカイブの主題、変化する主張、出来事の間で繰り返し示される関連を概観する。

**8.** 図解による解説はここで終わる。主張を評価するには原資料や独立した史料に立ち返ることが必要である。